



1月18  
號969  
卷11



繪本金花譜卷之十一

目録

岩城兵庫頭被召預率

革刀燒捨盟主率

才系如意は奸刺革刀率

才系羅主伏す才圖

才系隔計股合伏突圖

其二

大江廣元に惠はる各様の筆墨之珍一圖

又貞人権至氏の越後守代圖

繪本金花談卷之十一

真田一閔城主

伊達兵部正

岩城兵庫頭被召頃幸

岩城兵庫政秀勝の家事。家事の端士妻をもつてあり。爲めに

あつとつとも。才不勘免由が傷兵と被承家の威勢をもつて。思ひ

詫く思ふところ。その日未の刻の邊り。監察檢斷邊岡田竹八郎。大

三郎左衛門。御車の命を含んで出来り。渡まをうぶ既み今日才承

勅免由。兵庫政のばくとして。暇官常力と敷安みや。ボトモ。若向の義

分のみねせざるところ。大脇大丈彦。おまえと有難ことあるのゆ。

唯今度はと。とあり。是をもつて居えの明智生。す。車の筋を経て

のち兵庫政を石浦とよなへ。うけた。其をもあわせば

生でんももうかとすぐみ才不勘ふに居うと承へく。つまくせと多くへ

まろひが西撃断ふる。あらせたは波多野。其勢大うもくみゆ頬となる。から調査すら。も邪智ふらむ。兵庫改事の車重とも。ひ若波の武列

にこぶか。雅み落き。貞治酒井代のち。せあさこと。もきぬ。とお波をす。けり。西撃断は後江戸。せく。家士松多臣。わく。裁許江戸。すて。よぢ。しへ。そ。今。循環し

はく。くらわ道。はなび。越けり。兵庫頭江戸を。ま致新の裁許橋江戸の。あらう。を。禪。と。酒と

構。く。紫物。を。だ。行。る。是。か。そ。水。ぬ。荷。く。殿。若。第。刀。波。番。の。ふ。酒。け。く。

昇。ひ。ま。と。う。な。う。兵庫頭。極。や。と。う。至。量。の。傍。ひ。胸。塞。う。振。度。の。友。と。共。ふ。る。ひ。せ。し。童。醜。天。小。み。と。ひ。天。圓。の。が。る。み。も。あ。是。與。み。と。ひ。み。

よ。久。大。檢。跡。役。黒。沼。四。の。属。源。後。友。廣。間。は。ふ。立。よ。唯。今。大。暗。大。ま。廣。え。鉤

命。ト。こ。う。と。有。あ。う。佩。刀。が。じ。ふ。懷。中。の。一。あ。禁。つ。こ。う。今。と。立。れ。

兵庫改服。左。あ。び。ふ。懷。中。の。官。判。を。廢。よ。け。り。黒。沼。後。友。と。岡。田。

出。雲。守。と。兩。人。共。陣。改。と。ひ。く。板。波。ふ。と。う。虎。原。貞。清。の。兵。庫。改。の。れ。う。と

見。る。と。う。顏。見。令。を。く。言。格。だ。一。大。江。廣。え。最。赤。原。う。罪。科。ふ。落。て。後

奥。み。う。う。九。回。の。趣。を。頼。朝。三。高。く。且。兵。庫。改。が。罪。積。ご。向。尋。つ。た。が。に

ひ。鉤。金。を。暮。つ。も。る。く。と。立。か。う。鉤。金。の。文。古。抹。け。兵。庫。改。が。向。ひ。漢。ら。が。

ひ。度。服。合。事。カ。ヤ。か。う。か。付。達。上。國。生。年。友。樹。を。隱。居。し。幕。友。千。代

未。幼。ケ。と。付。縫。と。役。務。付。と。延。任。我。志。邪。く。な。方。有。之。室。不。布。か。黒。石。し

候。之。沖。紀。の。内。面。う。諒。翁。是。濃。並。前。時。友。の。作。付。者。也。

と。あ。う。な。と。兵。庫。改。改。と。言。く。諒。翁。は。や。よ。べ。が。唯。や。と。て。鉤。金。ふ。み。と。財。穀。と

移。こ。う。う。移。濃。並。同。時。友。を。ら。し。か。ま。と。兵。庫。改。改。と。其。日。の。黃。食。ふ。時。友。の

家。か。う。う。移。兵。庫。改。の。宿。取。作。わ。こ。と。か。る。兵。庫。改。惡。事。あ。れ。有。あ。が。い。

諒。翁。是。濃。並。同。へ。と。あ。づ。け。ら。う。間。字。う。行。有。る。と。よ。か。う。獨。ひ。よ。殊。ふ。な。が。い。

とおれの手をやりべ

革刀焼捨盟書手

ばとて東千代の鍔め兵庫頭尚志をもる不忠の徒夥（ひき）へく者々が才原勘定中  
飛（と）み伏（ふり）し連判狀革（か）を今うとす下（さ）り。極（ごく）にかゝるのううと實否（じし）をもば  
定めざうした腹切（はらきり）もあ。信病（のぶびやう）のともざくわ毒（あく）もあ。又大膽（だいあん）の者の爲めの  
通達（つうだつ）をもういのち。自又みほくぬまくたもくも首（くび）が刎（きり）らくも因（いん）一死の道。  
若くハ第力仁（じゆる）如キト。盟書詮鑒（せんげん）をもとみ極く紙（かみ）にて跡（あと）へりて。兩端（りょうばん）  
あふ變（かわる）ゆく待（まつ）もう。やまと國（くに）兵（へい）セうばと服告革（か）才原（さいはら）をあづら。彼（かれ）日  
そくと後緊（ごきん）しく寧林（ねいりん）を経（へ）ひ萬吉（まんきち）三三（さんさん）へとたゞうみ才原（さいはら）をだけ。ひて  
諸士公度（ふうすう）間（あ）に廢（あきらめ）。今日の時宜（じぎ）をもく後年（ごねん）わづけ。が、彼（かれ）うちゆもとの途  
えも向（むか）まむ不忠の人（ひと）あるよ。盟書（めいしょ）をもとぐらむる人（ひと）開封（かいほう）して罪（ざい）と亂（らん）

廢（あきらめ）とまう。今日上（あがめ）江戸（こうと）の事（こと）とし。熟慮（じゆりよ）て伏（ふ）す。以（い）兵庫改（か）  
よくの義理（ぎり）あり。かくあるへだの運（うん）ひみ。うそ犯（まつり）忘却（わうせつ）して。因意（いんぎ）  
せき坐（せきざ）て。うと參（さん）。唯今連判（れんぱん）恵（めぐみ）と封（くわ）のまく燒（やき）草（くさ）も。と間（あ）げ。後幸（こうこう）ふ  
立（たつ）。先般（せんぱん）悔（くや）て百倍の忠（ちゆう）いとあ。べ。と既（すぐ）み火中（ひちゆう）に投（なげ）すとす。を。と。遂  
まふ組（ぐみ）や。り。火中（ひちゆう）放（ほう）革（か）。歲性（さいせい）と。懷（いだ）じ忠（ちゆう）の。よも。ぐ。へ。憤（ふん）う。を。も  
何（なん）ぞ。不忠（ふちゆう）の。幽（ゆう）歎（たん）を。あ。り。あ。と。平（ひら）あ。ん。速（はや）み。開封（かいほう）。も。と。か。く。に。叫（さけ）。ひ。逐（よ）  
因（いん）の。ま。と。同（どう）み。こ。多。を。あ。げ。願。く。開。封。一。と。と。同。ま。み。叫。び。一。と。手。  
忠（ちゆう）の。ま。と。同。み。こ。多。を。あ。げ。願。く。開。封。一。と。と。同。ま。み。叫。び。一。と。手。  
ふ。一。と。手。を。見。ふ。け。革。刀。又。一。言。を。も。い。う。か。か。う。火。中。投。す。も。と。當時。の。燒。と。  
用。ひ。萬。小。を。バ。是。下。う。家。中。あ。と。ど。く。德。み。か。り。ー。と。や。を。革。刀。一。財。の。想。と。

のまゝ獨を植ひ。常力牛筋のところより連判帖を寫み開封して  
其名爲左にて片鳴かみづけふかえどり。果して翌年片鳴かみづけ三十郎を、  
さもくとも元の性重せうぢゆより。殺もあり。一代牢獄ろうごくみども有あり。  
あるて兵庫ひょうこびみほきせん。頭達かしゆつるりのみへ渡邊わたなべ新之湯しんのゆから金を奪だつう  
後川ごうかわ駿負しゅんぶ志賀しが三原みはら浜波市はまは湯模とうも志摩しま原田はらた  
市いち來きてか七十餘人じゅうよじんその日そのひ掘あり。奉岡ほうこう送おもてををくる。

松原勘兵衛奸刺常力事

其後まゝ松原勘兵衛宰中さむちゆうみあつて番士ばんしのともともづみづみトタクと兵庫ひょうこ又  
廣ひろえの權威ごんゐに挫すき是れなく罷科まがく及鬱まぐく々まぐく不ふも寧むかい病びやう休やすせば是  
所謂いわゆる依己よのの私割わたくちだら。某まことに心こころへ情じやうじみたしはまざまざ一死いつは嘸なまと記しと  
兵庫ひょうこ頭かしゆ兵ひょう令めいの所ところ爲ためうたうものもの。通案つうあんみちくみちく兵庫ひょうこ頭かしゆと  
そをそをトトと見見紹あトと久ひ人ひとはとと在あふああづるづるこそそすす生き活かくとと今いま更また  
裁さい判ばんををあつ立たととうとと自ま身み叫さけびびるるをを常じょう力りょくももは持もる成なり  
この名監察かんさつ諫けん諭ゆ度ど二に帝てい入いり至いた二に序じょ廿じゅう日にち通つう訪は度ど二に帝てい執つか列れつの  
ところところかく廣ひろえみ消き合あひ。廣ひろえまで改か姓せいうことかのの裁さい作さくををと  
云いひのちうちうととお道拵みちかかめめああとと處しゆきの冠かんみ空うつ入いりことと。然しかる  
ゆゆふふととから手てうちうちももああび。通つう勢ぜい法ほう沒ぼくの眼まなこああかかくくとと柔じやうををち  
ゆゆくくとと身み休やすし。今いまままとととと顧かのんととおおせせそそとと思おもひ。辛あト  
ををかかくくととそそままげげううの通つう音おんとと了りよう阿堂あらわの者もの。友とも人ひと不ふ引ひき。し  
絶きりととかか見みたたととナナ。何なんぞぞの事こと。とととと思おもひ。且よとときき金かなだ  
危あ彈だん字じ貞じやう清きよとと一い債さいの色いろととああ。とととと大だい脇わき獄ごくの言い葉葉ええとと。而ひて  
娘むすめ女めのと兵ひょう庫こ改か嫡お子こをを候ますす。嫁まつこみみ嫁まつこー。嫁まつこ家いえの犯まつこととああか

累貧してとどを乞ふれとも珍めあへばんくは刑と仁政とひきく行  
ひまことそ御代長久の奉ひなとす人も豈へ國へ治まこと百年以て五  
やめ穀を挙げとみり。こそ若者ありて國を治まとて殊無も自う  
ゆゑ教誦を用ひざして國治ること久しの後みあへばや竟寧の代  
ゆゑ元魏滅祀を民たゞと上仁にて穀と角ひざるより下自う  
悪を犯するなり。秦の商鞅へ法律めあつみ廢へづくと廢ふ其うど  
と牛羊をせよと。叶ぬまでも下なりのみ。仁政をもとめ廢する  
事も廢せば人とも考ふざる無みづかこそ君の恩渥が空海みかづか  
と云へられ足下の政道み頗うたる。まむむちに至ふして安否が深し。  
仁者ハ揚んときの法あり。善道とくとも天下の養生ごわハ深く至  
まび又仁の道みとびらむだあり。而の足も立てぬ所安するがんとくと  
万代不朽の志平。そのうるの歎へ。斧の歎へ。斧安波もかづく。斧もとれど  
斧城の歎を用ひくとも苦へる事す。たゞ山嶽海城の属ひみもせず。  
厭ふ体せざるのを。穀戦の用ひざして。況や兵庫改と小所とくとも天下  
の諸侯をねぐにやむくとねて苦へる事。事と船也もかづく。船もとれど  
あれく縁を食ひの何百人の難儀をや。よく遠慮がめぐらむと。傍矣と  
よく仁を画へ。とも堂ともひ教えとくと。遠慮がめぐらむと。傍矣と  
それとくと。仁惠行す。もとが國家の本とある。苟に源石山もひがくと  
のもう殊めの貞清の源安たる人ハ強く危ひも警へざく。萬もとくと  
あし。對支とすべとある。龜彈守も顔色さへだ再度の對支へ。とぞ家  
にまく水々へ。明け七日とくとくと下糸せよと。是ふを計のほまろ  
あし。かく友千代の鉢みは。顧々裁を仰とこうみせ。六月詔。務を國志所トヨシ

卷之三

三月三十日

預け入方原勘定由と照若革刀再度の對變付らるゝあり。明日

拂年

假年

の事又召連す。

甲辰

佐田甲賀

佐田

假年

假年

假年

刀とある。召ふちとがひ廿七日

貞清の弟へある。まもハ照若

佐

第一刀。向え周防。被蟲は本若外記高地司る。方原勘定由ハ

一ツ是因襲の

前後先ある。の壯士牛平。教寧み圍旋らし。梶原の被虫お與をどろし。

行進印紀

假年

假年

服若革刀衙門の内入兩鑑察にうがへするあくとゆゑぞ。照若の因の兩人

先達とおまく居まつて。革刀證ぐりけん假若お方原勘定由を

佐

假年

假年

假年

あれりと付きで小姓名わ極り。今

日十日十日因獄みそー立りども。

再び召すと新お對變作ひ。刑人の様式もつゝ。石連

島と付の底と之と一木レトジ。也。もとれ服とも着用。手ぐわ。はば

とぬ。不兩人等く頭瓜とよけ候。とねづらが。計ひゆたゞぎ。先般まよ

仰べーと因みづ。臂く。足を立ひ。もと度え本より。痛烈の不知。今日

再

度

度

度

度

再びの計ぬ。ある。うへ罪債免あら。今もあ。様通す。おとおと。医。

見

見

見

見

先日大膳お支の戴許。ゆき。と。お假み落。まくへれ服の着用。と。も。

見

見

見

見

喜万勿備。も。車。あ。と。後。一。け。派。お東方。有。の。さ。一。島。な。り。背。引。の。面。

見

見

見

見

檢政の活候。追。お宮。才。み。覆。う。革。刀。も。じ。被。蟲。の。く。内。金。國。と。云。か。う。

見

見

見

見

う。廣。翁。も。ある。方原勘定由。ハ。梶原翁。の。武。士。う。け。と。中。門。下。り。入。今。

見

見

見

見

大。江。朝。臣。唐。之。六。才。東。う。之。裁。ぬ。房。う。再。度。の。對。變。不。慶。と。と。を。と。ど。す。

見

見

見

見

徳友。ぬ。抽。一。く。着。た。あ。る。嘗。て。勘。定。由。も。だ。ま。こ。の。う。の。ち。る。う。ふ。大。唐。之。

見

見

見

見

い。う。か。勘。定。由。ハ。首。仰。う。み。死。ぬ。休。一。れ。飛。料。ハ。あ。く。と。だ。よ。と。立。再。度。の。

見

見

見

見

裁。判。ハ。義。翁。ハ。乞。う。と。上。底。萬。如。翁。も。う。ふ。仰。く。唯。今。何。を。う。と。の。ま。ん。

見

見

見

見

動。急。由。が。曰。先。日。常。刀。が。ま。る。と。う。な。場。家。易。ふ。あ。く。と。う。二。通。の。お。紙。全。く。

見

見

見

見

猶幸まことに一章は吟味のほど極へんとす。かとども早ざる不度え  
知れぬけり。なすい。言語同ひのゆゑうを。彼が云とこうの片々  
回々苦手とつとも歎くことあるがちの邪魔さう。ソレドモ先日陳謝せし  
ことぶみげ書の某うを讀みお遠ふれとす。友千代を毒害はれの  
わふあへば。友千代九死一生の大病とひるゝと。集をして良利の藥を  
潤をやつめ。廢巻のあよせ。する折紙など。言語のひづきみにせそ  
陳謝せ。うども。縫ひての船の廢巻。ことあくびして船の廢巻ふねを  
修業をへ何日生前のとむ。また僕事たうとおことうアドガれ其財へ  
左右の邪魔が殺く脱毛。我へて船を推向せ。じつに友千代、  
と毒害せ。も再び刺客のとく刺んとをうつ。もそれからあらゐる  
ありとあらの厄難日あら。唯今常力が盟書焼をてたうとせま。再び  
陳防へて船を遁へとをう。まうとも汝が方人や。河並ニ廢巻。うら  
ううみづのと。其跋立するりの七十余年と。彼案をてふ捕へられ。かふふ  
引きとどく。今そり蘿秦張儀が毎々據ても。とび流布せ。極惡の  
厄難日遁るべきアレ。とだ船の向み賣ら。才原勅。赤面にて  
唯一この道苦だ。まくかれて入まつ。かの邊ひをうつ。厄難日我わんと  
仕う。一段今陳がる言管ひつげ。何船のひ仕事も作つてうた  
が。も云ひ裁を。まくかれて入まつ。かの邊ひをうつ。厄難日我わんと  
をあへ。不相千万の仕事。先日のお紙と偽条あざれ列度の有りと。款  
て云うる暴惡の。まと。何のひ。も計り。ある厄難日我  
せうくとも。邊育つて。また口羽の文書ふうと。うきて耳。うくん。別々  
間支周防。高地司馬西人ふねうちわぐた子細あつ改く承た。あらん。この

あひどふ延科の口羽もあくまや早ぶべと云候を發を立たむ。同席の人々  
も眞清みをさうし西の間み移らへる。間宮高地兩人へ援通うようあるす。  
の間(まわづ)眞清間(まわづ)あくまやそのち間宮高地兩人ふがんじらかす  
坡中(はづなか)にあいと申じてく家勢(いえしの)ふあづうあらわす。又原(はら)主(ぬし)はくづけ岩城  
兵庫(ひょうこ)ふりゆく幸家(こうか)押領(おさめり)せんとまろと御(ご)めらひめりある道理(ぢぢ)  
まよに難(むずか)しくと間宮高地の兩人え本寛仁(ひろひと)の長者(ながし)なまくぞこしも  
幸(ひやう)の援(えん)をあくまざる准(じん)第(だい)が既(そな)してといたうつけ。ば間(まわづ)み右多(みぎ)の今(いま)原(はら)  
延科(のぶしな)をまよしおと羽(は)のまき茎(くき)つら。廣(ひろ)えふ傾(かたむ)いふとすうじ。稍(すこし)  
財(ざい)役(やく)をまくぐくうとうにげとて廣(ひろ)家の様(よう)通(とお)うみへ照(てら)若(わら)弟(おとこ)刀(と)ち原(はら)と  
相對(あたい)して庭(にわ)。そのあひど壁(かべ)五(ご)二(に)間(ま)ああう角(かど)す。又原(はら)が後の方(かた)  
助(すけ)兵(ひょう)由(ゆ)代(だい)の役(やく)本(ほん)田(た)外(ほか)記(き)。橘(たちばな)田(た)城(じゆう)を筑(つき)て二(に)間(ま)をう避(さけ)つてひくへ  
房(ぼう)山(さん)と申(まわづ)勤(きん)業(ぎょう)由(ゆ)情(じやう)中(なか)う一(いっ)通(つう)の文(もん)を公(ひやう)ひづ。すこべらう枝(えだ)を  
すくび巻(まき)とすみ。嗚呼(あい)天(あま)食(く)へ道(みち)をあくまざるうかと獨(ひとり)沈(沈)む  
そのうち墨(くろ)刀(と)み向(むか)ひ某(まも)と是(これ)下(しも)と向(むか)ひ同(ひと)列(れつ)の人(ひと)はみ殺(ころ)代(だい)君(きみ)を活(はな)し別(べつ)て某(まも)  
財(ざい)役(やく)をまくぐくうを拂(ぬ)きとて某(まも)と是(これ)下(しも)と向(むか)ひ同(ひと)列(れつ)の人(ひと)はみ殺(ころ)代(だい)君(きみ)を活(はな)し別(べつ)て某(まも)  
武(たけ)士(し)と面(おもて)あう。忽(すこ)ち厚(あつ)意(おもて)を失(うしな)く。遂(つい)に一(いっ)羽(は)タ(た)の聲(こゑ)  
にあ(あ)ひ(ひ)は(は)ど(ど)う因(いん)獄(ごく)の因(いん)みあ(あ)ひ(ひ)く。去(よ)波(なみ)を(を)ま(ま)る一(いっ)通(つう)あ(あ)は(は)星(ほし)下(しも)みお(お)ほ  
ト(と)べ。そき(そき)で(で)邊(へん)、礎(いしき)の刑(けい)みあ(あ)ひ(ひ)う。恩(おん)とも兩(ふた)人(ひと)國(くに)え(え)みあ(あ)ひ(ひ)ごれ(ごれ)す  
死(死)を(を)賜(たま)べ(べ)のち(のち)みは(は)き(き)ひ(ひ)く。諸(しろ)士(し)へ(へ)被(ひ)放(ほう)下(しも)され(さ)れ(さ)ば(ば)生(い)き(き)世(よ)の洪(こう)見(み)  
き(み)。身(み)み(み)か(か)げ刑(けい)み(み)せ(せ)き(き)み(み)が(が)殺(ころ)み(み)せ(せ)せ(せ)き(き)み(み)か(か)げ(げ)刑(けい)み(み)せ(せ)き(き)み(み)か(か)げ(げ)  
死(死)み(み)か(か)げ(げ)死(死)み(み)か(か)げ(げ)死(死)み(み)か(か)げ(げ)死(死)み(み)か(か)げ(げ)死(死)み(み)か(か)げ(げ)死(死)み(み)か(か)げ(げ)死(死)み(み)か(か)げ(げ)

寛仁大度を重んじて延年し、今らとまがはるはそぞんぎと云ふと傳へる。  
額色あり。革刀も才原が教代連綿の忠臣の子孫としてこの悪事か  
か一たるとして顧石審へしくせひされば何ちの子細にねがてどつせ  
か極のまもろりあぐれ。文書の方ぬあぐれと刑法の後端と被參渡  
べ。才原院のきぬあぐれ。また大の恩本義隆みたすあぐれ  
唯今うの去付を度へて、一氣に腰を下す。才原がその進、未だ  
詮計こくみ算をうつて、うえの中身に利刃の切先八寸をうち折  
さりの面すをうのあらぬをうぢち。文書の中ふ巻隠し。革刀が油のみ  
のところと目をとめ。胸板は唯一刺ひ刺徹し。のみまびの背懐をも  
さんとあくら、誠ひ人面歎ひのむひ。されど憎むハ何をうべくひき取  
對變ひあくせの後難がまへまあびて兵庫改め取次役はくま  
うぶ女才代がをも断絶せしゆく。廢のことまでも難清。無うこと  
扱才自才原囚獄は押こからまとて大切の因人をうづく。衣服の裏あたく  
搜一。手の鐵も取持せざるを今へしてこの巻りのうちふ利刃を源へ  
たらぞとしき。渠一あくねをよし紙多公室の中へくたぬまと請け合を  
久船の見ゆ茎をもく。縄ふ脚を手のあをうを深く送うされば口ふ  
こゑ、くとおあくら。今釣竿がゆるとて懷中へておこう。あくらこの裏へ  
白刃をくそ所收まうし。ふ落被もあうしとて、内吉國より廣  
安にゆく。才原の才原の仕士史がく出で、をひくを大意う揚へ  
たう。そのとて才原の諸士のうちふ華く内吉の達半をもくあくら  
う方へあつて、竊み内摸み又き公作うそのうちふ外縫のつもく公れ、今  
ヨリ。脇谷と緑ころさせ。高枝を搔へる。その斜ひ友千代の森み歸へ。

才原罪に  
伏しる圖



圓家を傾くものたゞあり。且て五像くされ詠く。寢堂の跡なりてある。  
かくの後ふ遠へよる。湯石抜目がた。革刀も。古中も禍ひ。公會も。  
とく義すもあらず。何故かく右の毛ぬぐ。一女を文とんとまると。實  
狩みやぞ。却く左の毛ぬぐ。革刀ざりを丁と抜り。巻隠へたる。その  
手。胸板をのどを拳も徹きと。冥込ごろ。忽ち胸門のみ血烟。うち絶つん  
とも。とくとも豪傑の老人。大吉み。通人やと。叫んで。脇差を尺ある。  
抜きと。然がちに奪ひ。とう常力が。家のうす。準段半。切つ。始める  
胸より。室と。脣と。眼同。と。身りと。けること。あらざる。年齢六十  
有余の老人。は方へ。大刀の刃を。とくろ。藏心腔の曲も。恨み。一方懐  
も。殊石と。つとも。堪うべと。勿様のう。又例と。死を才蒙が。と。後。その疾が  
多カ。ゆつ。もとと。あてり。刺。切。雷光極巒のひこう。も。疼く。夢  
血刀を携え。廣元。も。ササと。廻を。臨と。池へんと。そろと。紫谷外記。後  
ようと。びくつ。其腰。と。ぶら。か。例。と。外記。も。え。未を。あく。と。うな。劍術  
者。才原。を。切。もんと。良易。う。と。と。枕草の。被。中。と。ひ。と。よ。が。人  
を殺害せ。後。雖。主家。も。よ。が。と。畠。し。抱。と。あ。う。才原。血刀。と。墜  
身。を。顧。と。外記。ひ。う。の。肋骨。の。く。一。刀。突。出。くる。前。面。よ。う。へ。橋。田  
波。を。篤。つ。白。又。と。奪。ん。と。ち。と。う。を。猶。頑。に。突。一。うち。み。斬。刻。と。と。も  
かく。例。と。う。豪。ま。の。油。を。ぬ。精。ひ。を。抖。櫻。一。起。よ。う。と。の。ど。も。通。い  
づ。血。汝。眼。中。み。う。と。つ。か。ひ。と。本。あ。く。で。され。ど。も。と。う。壯。ま。れ。ば  
よ。も。あ。た。さ。う。ふ。右。の。股。み。組。つ。け。り。この。と。外。記。も。左。り。よ。み。組。と。う。と  
才原。再。び。兩。人。が。肩。を。あ。く。よ。み。切。込。み。す。と。兩。人。を。捕。よ。そ。う。と。う。と  
と。双。方。た。ぐ。ひ。め。声。を。う。け。振。ざ。抜。と。う。才原。が。右。よ。う。一。円。み。刺。貫。

其霜鋒檻尾のままで十文字に抜されば才原勇氣豪壯のものと  
べども即時ふ例れてなくぐり柴谷橋田もともふ別れ思通る。このれ音  
弓ヶ谷帝門一重へて諸友列座のまゝふねがく團のうひを舊地可る。  
さなづみ聲の度とあく駆あんとそら爲簾元の勅諭を團奉へ  
ども。づとあく隼作よりて。舊地同えよと向訊してねて兩人を立  
あたまへ是則慶元の芳志より自然兩人あやまつて帝門をひそ  
む。其勢ひふ手じて才原此とろく切入とわづか。才原の恨を  
とも遣りく劍とくうなりの諸司の列座へふねて。其罪友千代の家  
ふぬもくとやんと却てあづる体ふりそきれり此とん慶元より  
書院のまづ梶原家の諸士あまもあじらども。此鬪争の中へ躍り  
入らて遡るりの人もきづく。ふうめ居らし。あめうこくわく。

云々倒うと見て詰合のあぢ寺大まかげて一人の武士奥へかけ  
か解由がうされどつぶ花彈守は最前うち次の間の勅諭耳とて  
だて圓かうり。此と本圓とひく何と思へき。怨憤として  
座立んとされを。後のみゆ人あく。勿も足の段と扇のそして  
押(あ)て勅諭を貞清焦燥て顧み。嫡子八郎貞永うり。此人僅  
十八岁。父貞清の行ひ人をみ遣て。本院を平日讀みて居られ  
今日の勅諭を。み方原うしたと圓く度立んとせりと見る  
より。極どやかに列座の顧みを懷ひ。無言にて。其文を訓  
う。嗚呼。いざりの忠臣孝子。曾子孔文子。父の義  
ふさうを考り。謂乎孔文子。子。夫争士七人。之を  
亡道きりと。もとアハ失ひ。諸侯。互争に。ス人あると。ハ全道

とつとも其の國とノリあひぞ父は諫る子あうと往々不謹ひ隔離し  
唯今のがひとやド。大脇太夫慶元とそドメ列座のノリ一同ふらう。  
兩鑑察へて死傷の者數々と仕さんと座を立んと坐をもろと慶元とび  
とくめ我面破りあく。僅も同どそそき。吾の赤とあひてん。並  
み死傷のもの死アトナ。この段上圓ふ達とベーと。座とニシテの間  
にソ。一番小服若者ガ死骸のところふくらフアヘ。一所の  
金瘡大卒のものうちふとう。ちや他果ナ。慶元歎息一惜ハ  
國家の忠良暴虐のノリを死せることの不俊。よと次ふぞ原  
屍とて人面獸心の圓城を憎しみなうと次ふ紫台橋ノ側  
毛とくとくとみ源をうりとつともひよど呼吸めり。速小口外へ  
んどす。近わの士人坊主二人と歌トセ。近わみか詠湯ニ波也。  
兩人の坊主みか詠湯ノ紫台橋にて。海より引起セ。坊主近習と  
とも耳リとよひをトセ。頻ふ紫台橋名死んで蘓らせ度元とづく  
娶搔のまたみ還魂業と侍て外記が空す一入湯をそとたまへ。僅み  
某物喰ふ。かく息を吹遣セ。度元とくまむちみ叫んで外記  
外記ハウ。唯今の某湯をたゞふ受う。大脇太夫慶元不肖あり  
つとも。没死をわれと自ら。又へうとあう。外記忽眼と曰う。慶元  
のうれきを及ちよう。もお謝せんと仰を勅せ。二ノ所の金瘡より血流  
と勅仰。こゝにせば。兩手の膝の上ふ。率て下唇に行れ。と仕さんと  
あがれ。も。公卿も。と。侍自立。うじ。それより。まことに。公卿會  
勘解由白刃を捨て。出發と稱せまりと。すぐて某どもが罪す。う  
ちづめ。もううの圓城を切るめい。まおづも。死傷仕う程の

才原  
脂計  
照谷  
寔圖





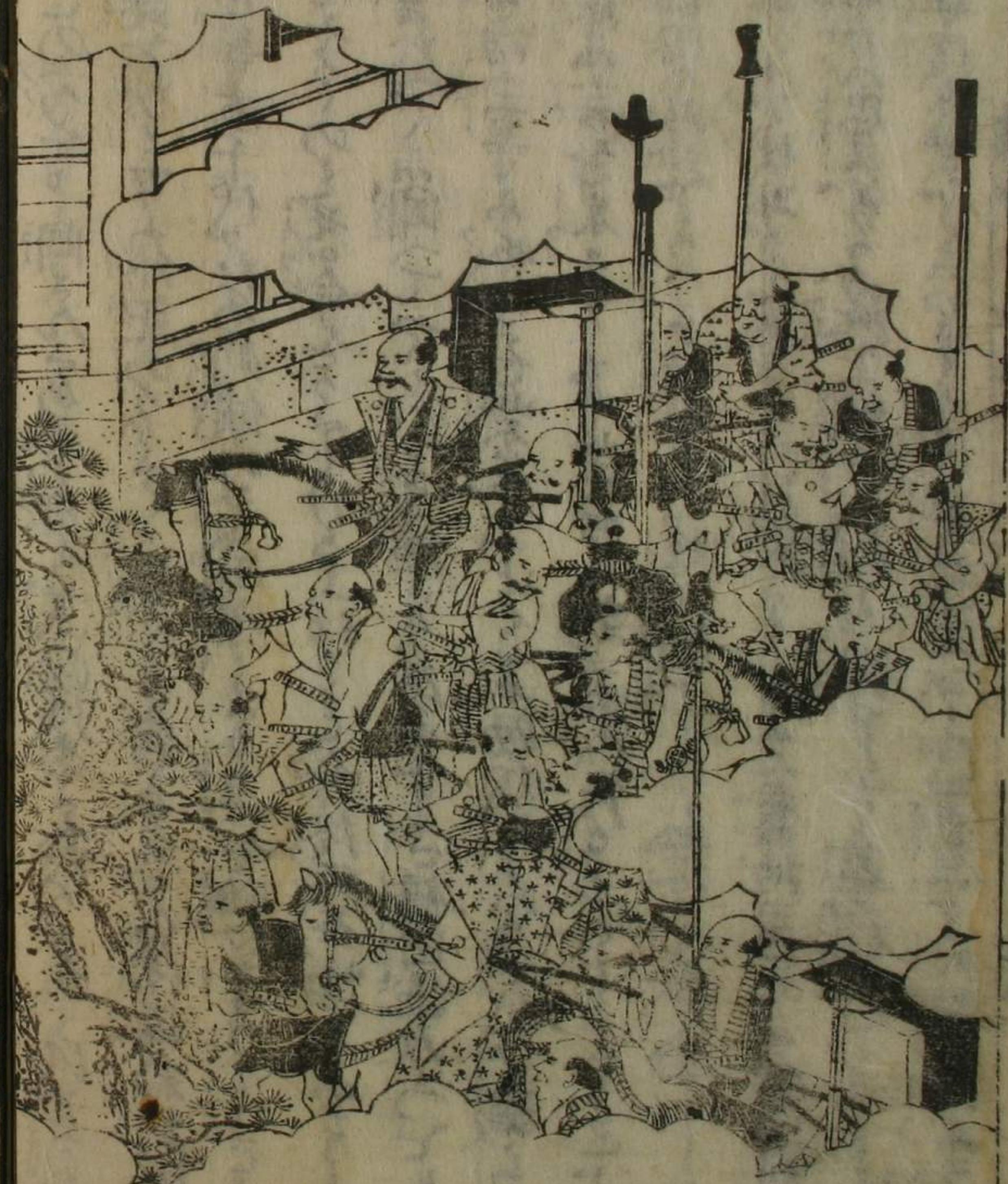
才系  
罪小脂  
柴谷  
橋田  
忻圖



大江廣元  
仁恵紫谷  
橋田よ萬  
あへ絵圖

ことと有りてくらとも大切のあづらん。雖ふ權貴の手も彼もあらず、  
剣戟をもちゆうとたゞ友千代が後難をおどす。施とあらず。被  
擱と仕う。此時宜ふやうび搜をうしよと囚人と刺とあらず。威  
罪科万死ぬあつひ。廣元外記みじき情ひうす忠良の心。此を  
死まで。汝等あくまでもうかうか勘解由そもうともうけ列の  
西切金と一毛も狼藉わざ。君家の大半ふほんべん勿ち  
劍を用ひて刺さる。駿鷹をれ渾るうのみ。桃李諸有司奉ひよ  
懲る。友千代の後難ともうか。誠ふ友千代ハ被活と持する  
果報のへやうべき。果報つとむ。汝ものごと山高の  
古きとあり其家の厚とこと世ふもくろとくともその命悉  
今日みわけり。本とぞすり。憐じふ縁から。汝たちが忠良を歓見  
この一々と。國さんある事と。某ゆふあつたう。うかうか。某の  
途と快く。もよ外記めぐく。未だともやうと。某はん落海殺ひゆて。  
臣等友千代。なあ列候の。そ。威凛。う。摩と。脚セモリー。ことと  
とちくの。も。命をうつけ。ははと。命終の。本懷。ふ。おも。と。と  
言たゞぐふ。聞て。う。じま。後。う。廣元。ま。橋田。逃。う。と。と  
智。坊主。等。ふ。お。抱。せ。崇。若。が。と。く。某。ゆ。ふ。な。ま。う。一。と。じ。蘿。ら。せ  
ぬ。み。言。を。永。う。く。某。榮。若。ふ。說。あ。し。る。う。と。と。と  
橋田。外記。う。く。痴。う。殊。ふ。腦。上。う。血。迷。う。合。掌。一。く  
廣元と伏。ゆ。と。其。ま。に。逸。へ。う。廣元。舊。地。司。馬。ふ。く。服。若  
革。か。へ。忠。う。屍。を。被。中。へ。ふ。く。洋。ま。く。葬。礼。わ。こ。う。と。じ。  
葬。後。ふ。や。あ。く。へ。う。遠。血。ま。と。う。び。だ。原。が。死。體。へ。ら。ま。ば

て  
手貞人  
梶原氏の  
館成ゆと圖



なまのをとて麻の席下かおのの後國法の罪科ふあるべし。  
手廻のまへ庭上へ駕をりちあつてうゆきと有ふ。同え  
舊地門外より坐し。即死の骸はあくまわの肉みつけけるふ。  
紫若が家來岩瀬甚藏とアリの駕をりせてまうだも上て外記  
年外記よ。外記岩瀬が叫びを圓て慶元の  
呼たぬをや思ひ。甚藏ふ向ひ首含げまことに重に内助を  
りて如慶元御言ふ賜る事。唯忍入をりとやく。甚藏甚  
とまくして岩瀬甚藏は延ひふまえ上せうとトクれへ外記怒て  
已先の者。何ぞ此とろへ生うべ。甚藏がり、内免を慕ふわ  
をもてまほま上ける。外記もまび吃て列候の内免をもく  
或がまもむ忍りあり。向て賤の心をりゆく来るのもうまわふ  
のまあどり憚をそそとぞう一言す。せめてまへ外記もまほと  
ひふ。度えもひばひうき。まかのらみ殿勤とつゝををひて  
ひじきのとや思ひ。甚藏もむらひ没ひのうぬるのふ。  
此ところへ門外うりとぞて駕ふのと有ーク。甚藏うそび  
中うそび此處へ門外玉てひとやられ外記もまほの内免  
う。是は月をもんと感ひ。うきとあう。あはう友十代の  
家士をのく。彼中もうう。と戴をまくりてモ居うちる。

